

高津区おはなしアーカイブ

●岩崎 輝彌(いわさき てるや)さん

昭和15年生まれ 75歳

川崎市高津区下作延2丁目在住



◆どんなご家族でしたか

父は昭和27年8月に49歳で亡くなり、母は平成11年3月に94歳で亡くなりました。9人兄弟で私は上から7番目です。母は5男4女を産みました。現在、私と3歳上の姉とすぐ下の妹だけになってしまいました。姉は逗子に、私と妹はここで隣り同士で住んでいます。

父は昭和4年に、旧246号線通路沿いで、今の宮崎中学校の近くで運送会社を創業しました。父は先見の明があったというか、自動車教習所の第一期生で免許を取得すると、いち早くトラックを購入しました。それで、農家の野菜などを東京へ運んだり、花嫁家具・衣裳一式を婚家に運んだりして、

喜ばれました。その運送会社の店内では、母と母方の祖父が雑貨や、食料品等を守るよろずやを経営していました。

お客がそば粉を持ってくれば、そばも打ってあげていたようです。当時のことは、今の吉川理髪店の方に聞けばわかりますよ。

母方の祖父は籠細工職人で、依頼者から注文があれば、どんなものでも工夫して作ったらしく、山の枯れ葉の背負い籠や、こし餡の餡漉しザル等を器用に作っていました。

昭和17、18年頃、戦争でガソリンが手に入らなくなると、父は会社を閉じて、この下作延に引っ越しました。当時はかなり、羽振りが良かったようです。隠居の身になっても株などを売って充分食べていきましたから。自宅も、このへんでは、一番大きな家でしたね。材木はケヤキを使い、屋根は日本瓦で、中廊下があるような入母屋造りでした。敷地は300坪あり、それは当時の岡医院から買ったと聞いています。

父は自分が経営していた会社とは別に、高津区内の別の合同運送会社(今の高津十字路あたり)の所長をしていました。当時の人々が地元でうまく商売ができるように、いろいろと世話をしていたようです。昔から、お祭りも先頭になってやっていたね。

◆そのお祭りとは

このあたりで有名なのは、秋の神明神社の

例大祭ですね。毎年9月の最終土日で2日間にわたり、神輿渡御及び演芸大会が開かれます。

円福寺の松柏林天満宮例大祭は11月3日の文化の日で、やはり演芸大会があります。この寺は学芸の神様の菅原道真公を祀っています。ここの演芸大会の司会は20年以上、私が務めています。父が早く亡くなったので親代わりとして、私の就職先まで世話してくれた先々代の住職の世話人の方から、司会を頼まれたことが発端で、それ以来、今日まで続いています。このお祭りはビンゴゲームなどもあり、けっこう盛り上がりします。景品は、生活用品や農家で採れた野菜や果物などです。演芸大会の終わりに、時間に余裕があれば歌好きな私の歌で締めます。音楽はどんなジャンルも好きですねえ。私は、落語も好きで小話などもするんですよ（笑）。祭りもそうですが、「講」などもこの地域では続いています。

◆現在も続く講とは

最近2軒が引っ越しをして、今は14世帯が繋がっています。下作延の一部の家、末長の一部の芹田家、竹田家及び森山家など、老若男女関係なく参加します。若い世代の人を入れないと先細りになってしまうのですが、なかなか難しいです。

冠婚葬祭の時など、講中の仲間は今でも固い絆で結ばれています。冠婚葬祭は昔は

自宅で執り行われたので、料理などもすべて助け合って作りましたが、時代でしょうか、今はすべて仕出し等です。

葬式は、自分の仕事を1、2日休んでも手伝います。私もそうしてきました。今も受付や道案内に立ちますし、マイクロバスで斎場に早めに行ったりもします。町内会とは別の存在ですね。

8月15日には、近くのお地藏さん(下作延地藏堂)で念仏供養があります。ここには十三仏の1つの地藏菩薩が祀られています。1945年4月4日の空襲で亡くなった17人の名前を刻んだ石碑が被災者の遺族の協力を得て建ててあります。

以前は、被災者のお位牌を地藏の前に並べてお念仏を唱えましたが、その後、戦災で亡くなった方々も合わせてのお念仏と決めました。それこそ夜の8時から始まって11時から12時くらいまでそのお堂の中に集まっていたねえ。今の地藏堂は、講中の皆様が賛同者から寄付を集めて建て直したものです。12年ごとの酉歳ご開帳もあり、その時は、「善の綱」という綱を皆で作ります。この地藏は、「子育て地藏」として知られているようです。昔の飢饉や疫病等の犠牲者の供養という本来の意味とは違ってきていますね。民衆の口伝えで変わってきたんでしょうね。

この地藏堂の話はまた、遺族として、あとのほうで述べたいと思います。

◆子どもの頃の遊びは

家の前の道路の国道246号線ができる前は、周りはずべて雑木林や畑や田んぼで、身代わり不動の前まで家が1軒もありませんでした。

遊び場は山と田んぼです。野山を走りまわり、チャンバラごっここの刀も自分で木を削って作っていました。弓矢も手作りですよ。家にお琴の糸があったので、それを使って弓を作り、竹笹を矢にして弓矢の出来上がりです。かなり危ない武器ですよ。

昆虫採集は、カブトムシです。お腹の上までシャツをたくし上げて、その中に入れて捕っていました。また、ヤマユリがたくさん自生していたので、球根を掘って、持って帰って食べたり、庭に埋めて花を楽しみました。ベーゴマやメンコもしましたねえ。もちろんベーゴマを研磨するのも、自分たちでします。

田んぼでは、腕を深く入れてザリガニ捕りをしました。「あばれ川」と言われた平瀬川が流れていて、自分で作った釣竿でフナ釣りも楽しみました。杉山の近くの田んぼのところでは、泉のように、こんこんと水も湧き出ているのですよ。

やはりガキ大将はいましたね。彼をリーダーに、下校したらすぐ外に遊びに出て、暗くなるまで帰りませんでした。昔、高津高女のあったところでは、よく野球遊びをしました。年齢が違って、小さい子が上級生についてくれば、その子たちのために

大きな柔らかい玉を竹の棒で打てるようにゴロなどを出してあげました。

3時のおやつの中には、近くの農家の人がサツマイモやとうもろこしを「食べてけ」と、どの子にもご馳走してくれました。私たちも、ままごと遊びとして、枯れ葉でサツマイモを焼いたりしました。親たちがやっていたことをそのまま真似するわけですから、まさに「子どもは親の鏡」という言い伝えどおりですよ。

◆当時の回りの様子は

昔、根もじり坂という所は、牛車で人糞を運ぶ難所だったのですが、そこに防空壕がありました。ところが、そこに路上生活者のような人が住み着いていて、その前を通るのが子ども心に恐くてねえ。防空壕は自分の庭の平地にも作り、サツマイモなどの貯蔵庫にも使っていました。

昭和28年頃、家から3軒先に、菊田屋という雑貨屋が1軒だけありました。お酒やお菓子を売ってましたね。

◆どんなご兄弟でしたか

私は、高津小学校出身です。秀才と言われていた兄(次男)の小学校の先生が戦後の私の小学6年の担任でした。昭和27年に父が亡くなると、その先生がお線香をあげにきてくださったのを覚えています。そして、高津中学に進学しました。歩いて40分くらいかかりました。

私は絵が好きだったので美術部に入部し、3年生の時には部長になったんです。美術部の先生に可愛がられましたね。「卒業記念に、動物の絵を飾りたいから描いてほしい」と言われ、先生と一緒に動物園にスケッチに行ったことは良い思い出になっています。この経験は、のちのち私が保護司になった時に役立ちました。「両親や先生をまず好きになりなさい。そうすると、両親や先生からも好かれるようになります」と、いつも担当になった非行をしてしまった子どもたちに言っていました。

中学3年生の時に描いた絵が校長室に飾られました。今の梶ヶ谷駅前の末長に、泉のように水が湧いていて、池沼がありました。その景色を描いたのです。あの絵は、今どうなったのかなあと時々思い出しますね。

高校は県立川崎高校です。サッカー部に入部したものの、肉離れを起こし、離脱しました。なぜか試合になるとケガをして帰ってくるのです(笑)。ただ、走るのが早かったので、駅伝などでは、活躍できました。

小さい時に、兄(長男)の遺品の中に剣道の武具である竹刀や兜などがあり、よくそれで遊んだのを覚えています。その兄は、視力があまり良くなかったので、通信部隊に志願しようとして、指で押す通信機械のようなもので練習していたと聞いてます。その兄はたいへんな読書家でもあり、母曰

く「神田の本屋で買ってきていたらしい」という本が、物置にびっしりありました。哲学書や狂言集や戦国絵巻物などもありました。あの絵巻物は現存してたら、相当高価なものだと思います。

◆ご家族が戦争の犠牲に

終戦の年である昭和20年、私は5歳でした。その年の4月4日明け方4時にアメリカ軍のB29戦闘機が我が家の近くに爆弾と焼夷弾の雨を降らせました。その時の惨状は聞くところによると地獄のようであったとのことです。

私の兄3人(享年、長男17歳、次男14歳、4男9歳)が爆弾で同時に死亡しました。その時、犠牲となった17人の死体はバラバラで本人確認ができないようでした。なんとか着ていた衣類の柄で、一つ一つの遺体にまとめたそうです。

兄3人は、父が高津の町の消防団になっていたことから、高津の町が爆撃で真っ赤に燃えているとの情報で、責任感の強い父は、長男に「一足先に偵察に行って来い」と命じたところ、弟2人が長男について行ったそうです。父が「ゲートル」を巻いていた矢先、物凄い爆音がして、その被害が起きたそうです。

爆弾が落ちると物凄い火花が出たそうです。瞬間、「怖い！」と家に逃げた人が助かり、「なんだ？」と家から出てきた人が爆弾の破片にやられて死んだとも聞いてま

す。私の兄達の死体もバラバラでしたが、なんとか集めてリヤカーに乗せて運び、家の庭にゴザを敷き、死体を水で清めたそうです。

母は病身だったので、父は母に、息子の無残な死体を見せたら、母が卒倒して死んでしまうからという配慮から見せなかったと聞いています。

被災した死体の処理はどうしたかということ、合同で火葬にしたそうです。骨壺には、木の燃えかすと少しの骨しか入ってなかったそうです。

母は夕方になると、息子の3人の名前を呼んで泣いていたそうです。それは、お隣りの方から聞きました。母の嘆きを思うと胸が痛くなります。母には、まだ4人の子がいたので、死ぬわけにはいかなかったのでしょう。戦争の極限状況の中で、悲しみをこらえて、生きていくより仕方がなかったのです。

これが先ほどお話した、下作延地藏堂のお地藏さんと、17人の被災者の名前を刻んだ石碑と、8月15日の念仏供養のことです。

人と人が殺し合う戦争は絶対あってはならない。人間の尊厳、幸福を守り、暴力をなくし、世界の平和を、日本の平和を守らなければなりません。これは、戦争体験者の切実な願いであります。

◆75年間、この地に住まれて次世代に一言

横浜地方法務局勤務から始まり、各地の法務局に異動、定年まで勤め上げました。ここから片道2時間以上で通った勤務地は1箇所ではありません。

40歳代の若い頃は、忙しくても子ども会育成会長になり、土日には子どもたちとよく遊び、親子運動会にも参加していました。今は、老人クラブの会長です。

地域を愛することは、地域から愛され信頼されることになると思います。私の経験則から、地域に奉仕するということを教えていきたいと思います。そして、若い人にも地域を愛し、奉仕してほしいと思います。

それが、ひいては日本の平和に繋がると思います。

(平成27年6月18日取材)